

講演概要

造幣局 154 年のあゆみと明治日本の産業革命

百嶋計（京都大学公共政策大学院特別教授、元独立行政法人造幣局理事長）

1. 造幣局の現状

造幣局は、貨幣・勲章の製造のほか、収集用貨幣セットの販売、金属工芸品の製造・販売、貴金属製品の品位証明という業務を行っている国の独立行政法人で、大阪に本局があります。

「通貨法」では、通貨(お金)とは貨幣(硬貨)と日本銀行券(紙幣)とされ、貨幣は政府が発行主体で造幣局が製造、日本銀行券は日本銀行が発注して国立印刷局が製造するとされています。

2. 創業者たちの群像—造幣局はなぜ大阪にあるのか

造幣局の創業は 1871 年で 2021 年に 150 周年を迎えました。幕末に日本の貨幣制度が大混乱したため幕府は諸外国から近代貨幣制度を構築するよう求められ、明治新政府が引き継いで造幣工場を建設することとなりました。大阪に造幣局が置かれたのは、王政復古に大坂商人の協力があつたこと、一時大坂遷都論があつたこと、東京が戊辰戦争下であつたこと、大坂が天下の台所だつたことなどが理由でしょう。

そして明治維新の功労者の多くが造幣局の創業に関わっています。五代友厚は、長崎のグラバーに依頼して機械を調達しました。幕末にイギリスに密航留学した「長州ファイブ」のうち、伊藤博文、井上馨、井上勝、遠藤謹助(桜の通り抜けを始めた局長)が造幣局のトップを務めています。明治天皇が行幸され、西郷隆盛も随行しています。大隈重信は貨幣の単位を「円」と決めました。

3. 新紙幣の顔・渋沢栄一と造幣局

昨年から 1 万円札の肖像となつた渋沢栄一も大阪に長期出張し造幣局の業務を監督しています。なお渋沢はその後初代紙幣頭となりました。紙幣の顔になるべくしてなつたと言えるでしょう。

4. 造幣局と明治日本の産業革命

造幣局は日本の近代工業発祥の地でもあります。硫酸ソーダ、コークス、ガスを自給自足し、ガス燈は横浜よりも早く灯り、馬車鉄道は新橋・横浜間の鉄道よりも早く開通しました。複式簿記も最初に導入されました。世界文化遺産の富岡製糸場、八幡製鐵所と並んで造幣局は明治の「三大官営工場」とも言われています。

こうした日本の産業革命では、お雇い外国人も活躍しました。中でも冶金・化学の専門家ガウランドは、登山家、考古学者としても知られています。造幣局の敷地の一部は後に三菱に払い下げられ、ガウランドの指導を受けた技術者とともに大阪精錬所に引き継がれていきました。

5. 「鉱石の道」と造幣局

古い資料によると、中瀬鉱山の金や生野鉱山の銀が造幣局に納入されていたようです。また関宮で鉱脈の試掘を行ったとの記録もあります。「鉱石の道」は造幣局とも繋がっていたと伺えます。

6. 最近の貨幣流通とこれからの造幣局

創業者たちの志を受け継ぎ、造幣局は現在も「信頼と挑戦」を行動規範としています。純正画一で偽造されない貨幣を供給することを第一の使命とし、2021年には新5百円バイカラー・クラッド貨幣の製造を開始しました。キャッシュレス化の進展や硬貨取扱手数料の導入もあって貨幣の流通量は減っており、年間の貨幣製造量は大きく減っています。しかしながら造幣局の使命は変わりません。最近では、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)記念貨幣や国立公園制度100周年記念貨幣といった新技術を織り込んだ記念貨幣の製造に当たっています。また、外国貨幣や魅力ある金属工芸品の製造など新たな挑戦も続けていくでしょう。併せて博物館や通り抜けの桜を擁して地域貢献に努めて行くことと思います。